

欧米の若手研究者 「日本の研究生生活」を語る

福井牧子

ジャーナリスト

アメリカ、イギリス、フランス、ドイツの大学院生や学位取得後間もない研究者たち93名が、日本各地の国立大学などで2カ月間の研究生生活を送った。ほとんどの人にとって初めての日本だったが、彼女や彼が、何を見、何を聞き、何を感じ、何を考えたのか、その率直かつユニークな意見に耳を傾けてみよう。

「若手外国人研究者短期研究プログラム」は、総研大が始め、文部科学省の事業として続けられている。欧米の若手研究者が、6月末から2カ月間、総研大での1週間の研修の後、日本の国立大学などを訪問し、共同研究を行う。先端的学術情報の交換、日本と外国の若手研究者間の知的刺激による研究者養成、学術国際交流の積極的な推進を目的としている。

「2カ月はあまりにも短い。もう少し長ければよかったのに」というのが、文部科学省と総合研究大学院大学が共催する「若手外国人研究者短期研究プログラム」の参加者の大半から聞かれた要望だ。

8月22、23日に東京品川のホテル・パシフィックで開かれたレポート発表とさよならパーティーに出席した90人を越える若者たちの大半は、Tシャツにジーパンというラフな格好で、2カ月ぶりの

仲間との再会を喜びあっていた。彼らの目に、日本の研究生生活がどのように映ったのか、生の声を紹介していこう。

言葉の壁を乗り越える

日本語を勉強したことがある、あるいは以前に来日したことのある学生は10人ほど。その他の人にとっては、来日直後に葉山の湘南国際村センターで受けた3日間の研修が、日本語や文化などについての最初の手ほどきで、そこで得た挨拶などの基本的なフレーズを命綱に、日常および研究生生活を2カ月間乗りきったわけだ。

米・シカゴ大学大学院で心理学を専攻するショーン・ダフィーさんは、京都大学大学院人間・環境学研究科の研究室で、日本語のわかるドイツ人学生から日本語を教えてもらうのと交換に、統計を教えるという形で、積極的に日本語を学習した。が、最初はレストランで注文するにも一苦勞で、「鶏

Shawn Archibeque

ショーン・アーチベク
Shawn Archibeque
米・テキサスA&M大学大学院（動物学）

京都大学大学院農学研究科



肉を食べたいときは、クワツ、クワツと声をあげ、羽ばたく真似をしました」と笑う。

動物学を専攻する米・テキサスA&M大学大学院のショーン・アーチベクさんは、「すべてのことに圧倒されてしまい、恥ずかしいという気持ちを克服するのに1週間半かかりました」と京都大学大学院農学研究科での経験を振り返り、「『ありがとうございます』『すみません』という言葉の威力が、この2カ月で本当によくわかりました」という。

コンピュータソフトの日本語障壁についても指摘があった。

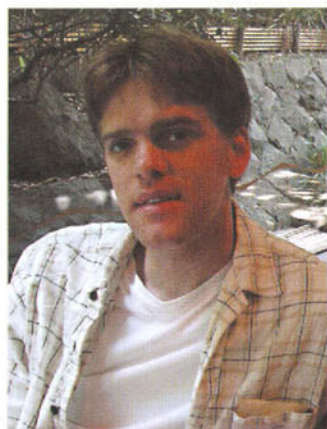
九州大学有機化学基礎研究センターに行った英・バース大学大学院のロランス・ボッシュさんは、「研究所のコンピュータソフトが日本語のシステムだったので、コンピュータを使いこなすのが一苦勞でした。助けてくれる人がいたからこなせましたが、みんな忙しいので申し訳ない気がしました」

大人気のホームステイ

プログラムの中で最も人気が高かったのは、研修時の葉山近郊家庭における2泊3日のホームステイだ。「プログラムのハイライト。滞日中に再度ファミリーを訪れました」や「帰国後もずっと連絡を取り合いたい」というコメントが出るほど好評だった。

「夫婦、親子の関係が、自分たちと似ているようでどこか違っているところが面白かった」と、微妙なニュアンスを体験した人も多い。

オーストリア・ザルツブルク大学大学院で異文化コミュニケーション研究を行うドイツ人のアストリッド・ドブマイアーさんは、4世代の家族が同居するホームステイの家族を通して、生活の伝統的な様式から現代的な側面まで学ぶことができたこと大満足。ホストファミリーがドイツに来たら、ぜひともババリア地方のライフスタイルを紹介したいと思っている。



Evan Berglund

エバン・バーグランド
Evan Berglund
米・ミネソタ大学大学院（土工学）

東京工業大学大学院理工学研究科



Sean Duffy

シオン・ダフィー
Sean Duffy
米・シカゴ大学大学院 (心理学)

京都大学大学院人間・環境学部研究科

各研究機関への派遣後も、ホームステイ先を紹介してもらったかかったという意見が多く出た。各地での滞在先については、受入れ機関が手配するが、当りはずれがある。とくに東京や大阪など大都市では、オプションがなく、「滞在費の高いホテルを紹介された」、あるいは「安い共同トイレで清潔感の乏しい四畳半一間のアパートを紹介された」など不満が目立つ。

アーチベクさんは、京都で朝食付き1カ月16万円のホテルに滞在。「やり直せるものなら、もっと安いところに泊まります」と。

同じ京都でも外国人の多く住むゲストハウスに滞在したダフィーさんは、家賃が安いので、支給手当てで北海道大学に行く費用を賄うことができた。「ゲストハウスは狭くて、清潔とはいえませんが、かえって積極的に外に出ようという気持ちになりました」

フランス人のボッシュさんは、福岡で外国人研究者・学生用の寮に入った。「寮では、最寄りの駅、近道、小旅行など生活に役立つ情報が入るので、試行錯誤せずすみしました。また、受入れ機関は違うにしろ、同じプログラムの参加者がいたので心強かったです」

つくばの物質・材料研究機構・物質研究所に行った米・ジョージア工科大学大学院のジェニファー・ジョーダンさんも、外国人用の寮生活を満喫。「つくばに行って本当によかった。寮ではいろんな

活動が常に計画されていました」

また、住居問題に絡んで、欧米若手研究者の合理的な金銭感覚も浮彫りになった。プログラム参加者には日本政府から往復の旅費と、滞在費および研究費として1日約1万円が支給されている。参加者の多くが家賃を押さえ、研究や国内旅行に回すことを希望。また、オリエンテーションやお別れパーティーのために高級ホテルに宿泊するのは贅沢で、その分を個人用の経費に回して欲しいという意見が多く出た。

もちろん、給付額そのものは十分で、金銭的にも寛容でありがたいというのが多数意見だ。若手研究者の生活はどここの国でも大変なので、「一緒に働いている日本人研究者に申し訳ないような気がした」や「日本の研究者にも海外でこのような経験を是非ともしてもらいたい」という思いやりのあるコメントも出た。

研究室生活というカルチャーショック

研究室では、忙しい担当教官に代わり、学生が暖かく対応してくれたと感じる人が多かった。中には、研究室の学生が交替でチューターとして付き、研究方法、研究室生活から私生活まで共有したので、日本の研究生活をとことん味わえたという人もいた。

ミネソタ大学大学院で土木工学を専攻するエバン・パークランドさんは、東京工業大学大学院総合

理工学研究科の研究室の学生との交流を、「毎日違う学生がお昼に連れて行ってくれ、とても仲良くなれました。パーティーや、ピリヤードやボーリングなど、学外でも研究室全体で活動することがよくありました。日本語は全然分かりませんが、みんなが英語を話そうとしてくれました。英語が上手な人とはもちろん、そうでない人とも、簡単な単語を使っていいコミュニケーションができたと思います」と語る。

アーチベクさんも、研究室の居心地のよさを強調。「研究室は最高。みんな親切で、教授も大半の学生も英語が上手です。話せない人もビールを飲みに行こうと誘ってくれたり。いつも行っていたわけではありませんが(笑)」

ダフィーさんも、「同じ研究所の人と夕食に行ったり、ちょこっと飲みに行ったり。そういうことを通して日本文化を知りました。同国人と外人バーに行ってもあまり学ぶことはありません。日本人と居酒屋でいろんな日本酒をトライしてみたほうがいい」と課外活動を奨励。「とにかくいろんな友達を一生懸命作りました。私は見た日も中身もアウトサイダー。これは明白なことで、チャレンジせねばならぬことがたくさんありましたが、得られたものはすごい」

しかし、参加者のほとんどが、日本人の研究室中心の生活にびっくりした様子。このようなスタイ

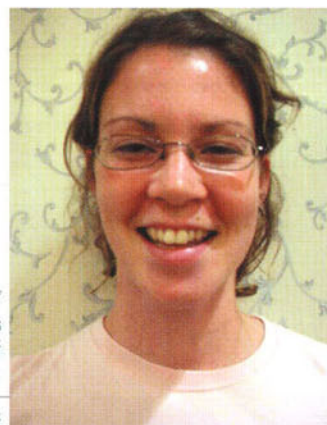
ルは短期間ならば受け入れられるが、本質的には私生活をもっと大切にしたいという意見が大半だ。

大阪大学大学院工学研究科に行ったマサチューセッツ工科大学大学院のジョン・ロックさんは、「研究室にいる時間が米国に比べずっとずっと長い。そのためか、院生たちは互いによく理解しあっていると思います」と研究室の人間関係を分析。ただし、「2カ月だからみんなの時間帯に合わせたが、これが5年のプログラムだったら無理でしょう。いつも一緒にいるというのはどうも…。他にもやりたいことがありますから」と。本国では学生団体に参加したり、アウトドアスポーツを楽しんだりするロックさんからみると、「研究所の仲間=遊び友達」という日本の感覚には違和感があるようだ。

また、研究室の始まりが遅く、夜中までいるという習慣は、かえって生産性を下げているのではないかと、という疑問も出た。

ボッシュさんは、「英国の研究室では夜遅くまでいることはほとんどありません。日本にいるからには私も日本式でやってみよう、朝9時から夜11時まででしたが、英国では家でやるようなことも研究室でやっているようです」

朝型のスタイルに慣れたアーチベクさんも同意見。「私は米国では朝6時に研究室に行き、夜の6時には帰宅し、友達や家族との時間を楽しみます。日本では朝10



Jenny Stephens

ジェニー・ステファンス
Jenny Stephens
米・ジョン・ホプキンス大学医学研究所
(感染症・熱帯医学)

大阪大学微生物病研究所



ロランス・ボッシュ
Laurence Bosch
フランス人
英・バース大学大学院 (有機化学)
九州大学有機化学基礎研究センター

時にならないと誰も研究室には現れませんし、夜は9時頃までみんないません。最初の内はそういうスケジュールに慣れるのが大変でした。でも、朝7時に研究室に行くと、誰もいないので自分の研究に集中でき、質問したいことが出てくる頃にみんなやって来るといういい形に落ち着きました」と。

東京工業大学大学院も同じスタイルだとバグランドさんもいう。

また、大勢の人が驚いたのは、研究室で寝ている学生がいたことだ。「朝来ると、机の下の寝袋で2、3人寝ていることがよくありました」、「日本の研究室にはシャワーもあるし、洗面所には歯ブラシが並んでいます」、「少なくとも1日1回は研究室の外に出た方がいいと思います…」などの言葉が口々に出た。

岡崎国立共同研究機構・生理学研究所に派遣された英・ブリストル大学大学院のエジヘ・オクワディグボさんは、「朝9時から夜11時まで研究室にいるのは、早く家に帰ると一生懸命働いているというイメージが損なわれるからではないでしょうか。夜も遅くなってくると眠いし、早く切り上げたほうが効率よいと思うのですが」

研究室内で長時間過ごし同僚と密な関係を築いているという日本人研究者像の他に、参加者が驚いたのは、月に何回も行われる研究室のミーティングだ。とくに土曜日に行われるミーティングは自国

では考えられないとのこと。

「毎土曜日にミーティングがありました。日本語なのでまるでわからず大変でした」とボッシュさん。

オクワディグボさんも土曜日のミーティングには驚きを隠せない。「ミーティングでは、各自の論文を読んだりして、研究について研究室全体で討議します。もちろん日本語です。週3回、土曜日もあるのには驚きでした。英国では土曜日は必ず休みです」

一方、京都の国際日本文化研究センターに派遣されたドブマイアーさんは、独自に自分のフィールド研究を進めることができた研究所の環境に満足の様子。「指導教官も他の研究者も、私が独自に研究計画をたて、自由に研究することを認めてくれました。これは人文・社会科学系の研究にはとても重要です」

日本の大衆文化と、それがドイツ語圏の国々に及ぼす影響につい

エジヘ・オクワディグボ
Ezihe Okwuadigbo
英・ブリストル大学大学院
(分子生理学)

岡崎国立共同研究機構・生理学研究所



Ezihe Okwuadigbo

て研究している彼女は、漫画や映像専攻の日本の大学生にインタビューし、博士論文に必要なデータを収集することができたという。

個人プレーvsチームワーク

ミーティングで互いの知識や経験を与え合い、研究に協力しあう日本のチームワークは、個人の業績に重きが置かれる米国の研究者の目には新鮮に映ったようだ。

ダフィーさんは、「ミーティングでは、『これが私のやってきた研究です』とはいわずに、『こういう研究をしてきましたが、こんな問題があります。何か提案はありませんか?』と尋ねます。それに対し『次のステップではこうしたほうがいい』といった助言が飛び交う。米国ではそんな光景を目にしたことがほとんどありません。各自が自分のプロジェクトに没頭し、そんなにコミュニケーションをとろうとはしないのです。

日本の研究室には、知識に対する共同体的なアプローチがありとても雰囲気がいい。個人よりも集団を重んじる、全員が互いに協力するという体制がとても気に入りました」と賞賛する。

しかしながら、このような活発な意見交換や質問は同輩や先輩の間でのやりとりであり、ミーティング中に指導教授に対して質問をぶつけることをしない日本人研究者の態度に疑問を感じる人もいた。「教授の発言に対して、『なぜ?』『どうして?』という質問するのは私だけでした。日本人研究者はシャイだからでしょうか。これは私の今までの環境とはまったく違います。」と、大阪大学微生物病研究所で研究をした米・ジョン・ホブキンズ大学医学研究所のジェニー・ステファンズさんはいう。さらに、「学生が遠慮がちなのは、日本にヒエラルキーシステムがまだあり、それに威圧されているからかもしれません。これは、よくある外国人の日本論のように聞こえるかもしれませんが、日本の社会も変わりつつあると思います。このような側面を実際にある程度は目にしました」という。さらに「私は教授によく質問したので、それを見た日本の学生が臆せず質問しようと思ってくれればいいですね。質問は学習の不可欠な要素です」と期待する。

琉球大学熱帯生物圏研究センターで生態学の研究を行った米・コ

Jennifer Jordan

ジェニファー・ジョーダン
Jennifer Jordan
米・ジョージア工科大学大学院
(材料科学)

物質・材料研究機構・物質研究所



ネチカット大学大学院のローリー・ラブランテさんからも同意見が出た。「教授が言うことは必ず正しいと思う傾向が日本の学生にはあります。尊敬の念の表れでしょうが、教授の発言でも疑問をもつことは大切です。米国ではもっと自由に考えるよう奨励されるし、それでこそ円滑なコミュニケーションがはかれるのだと思います」

忙しい日本の指導教官

参加者の多くは、指導教官が多忙なために、会う機会があまりなかったと報告している。しかし、アドバイスが必要ならば会うこともでき、何よりたいていの疑問には他の研究者が応対してくれたので、とくに不都合はなかったという。「指導教授は信じられないくらい忙しいのでした。お昼休みに2、3回しゃべることができたくらい。初めて研究室を訪れた日も、一緒に夕食をとるはずでしたが、突然会議が入り、急遽大学の総長との夕食に行くことになりました」とバークランドさん。

ロックさんは、教授のタイプはどここの国でも研究室ごとに様々で、一般論では語れないという。「指導教授と一対一で話し合う機会はあまりありませんでしたが、助言が必要な時は助けてくれました。日米比較は難しい。日本でも米国でも教授のタイプはいろいろです」

アーチベクさんは、「牛の細胞

John Lock

ジョン・ロック
John Lock
米・マサチューセッツ工科大学大学院
(化学工学)

大阪大学大学院工学研究科



を扱う技術を習いたったのですが、教授の代わりに院生がこの新しい技術を教えてくれました。日本の研究者と実験を一緒にすることを思いつき、教授と話し合ったのが一番長いコミュニケーションでした」という。また、日本と米国では組織体制が違うと指摘。「私の訪問した研究室では、教授も助教授も助手も同じ研究室にいますが、米国では各々が研究室をもっています。日本の研究室の教授には滞在中5、6回しか会っていませんが、助手はいつも研究室に居て院生の研究方向などを指導していました。教授が研究費を調達し研究を進めるため枠組をつくる、その枠組の中で助手が若手研究者と一緒に研究を進めていくという体制のようです。一方、米国では各々が研究費を調達し、学生や研究者を直接指導する。米国の私の研究室では、学生数が少ないのでそれが可能なのでしょう」

今後の国際協力体制

2カ月では、とうてい満足の行く研究成果が出せないというのが大半の感想だが、プログラムに対する評価はかなり高い。「米国では決して触れることのできなかつた考え方や研究へのアプローチを学ぶことができ幸運だった」、「研究室で一緒に研究した院生の何人かは私の研究室でポスドクをしたいといっているので楽しみ」、「似たようなテーマを研究している日本の研究者に会えてよかった」、「科学、文化、自分自身を知るよい機会。日本について学び、この国が一杯与えるものをもっていることを再確認した」などの声が多くあがっている。

肉牛研究のアーチベクさんのように、教授と話し合ううちに新たな研究プロジェクトが始まり、日米の研究所在共同で研究費を申請することになったというケースも

珍しくない。「日本の研究室には米国の研究室にはない設備があるし、米国の研究室は隣が牛舎です。互いの利点を活用しあう、素晴らしい研究協力が始まることを期待しています」

心理学の研究レポートを指導教授、日本人研究者2名とで共同執筆し、発表したダフィーさんは、帰国後も長距離共同研究を続行する予定だ。「コミュニケーション・ツールを駆使して連絡を取り合います。メールでは、意見を交換したり、提案したり、研究レポートの互いのセクションに手を入れることもできます。顔を会わせなくても、共同研究は可能です」 「若手外国人研究者短期研究プログラム」では、欧米の協力関係にある研究所の指導教授やプログラムに参加したことのある先輩からの推薦による応募が圧倒的に多い。そのため、個々の参加者の経験や達成感が、プログラムの活性化に多大な影響力を持っている。参加者は満場一致で、自分の後輩に是非ともこのプログラムを勧めたいと。また、各自の研究抱負からは、個人の交流が国際協同研究へと徐々に、しかし確実に広がっている様子が伝わってくる。

ドイツのドブマイアーさんは帰国後のメールで、「ほとんどの同僚たちと今でも連絡を取り合っています。1人はもうミュンヘンにいる私を訪ねてきました」と報告している。



Lori LaPlante

ローリー・ラブランテ
Lori LaPlante
米・コネチカット大学大学院
(生態学)

琉球大学熱帯生物圏研究センター瀬底実験所

Astrid Dobmeier

アストリド・ドブマイアー
Astrid Dobmeier / ドイツ人
オーストリア・ザルツブルク大学大学院
(異文化コミュニケーション)

国際日本文化研究センター

